

谷崎潤一郎の『刺青』『麒麟』『少年』 『秘密』に於ける女性 -悪魔主義と耽美主義を中心に-

呉 秉 禹*

(e-mail : hl5bhe@hanmail.net)

< 목 차 >

序論	第3章 『少年』に現れた悪魔主義のサディスト
第1章 犯罪小説『刺青』と悪魔主義	第4章 女性化願望の『秘密』と悪魔主義
第2章 『麒麟』の南子夫人と悪魔主義	結論

キーワード：悪魔 (devil), 耽美(Worship of beauty), フェティシズム(Fetishism), サディスト(Sadist), マソヒスト(Masochist)

序論

谷崎潤一郎と言えば、美女と美食を味到して至福の一生を終えた耽美派の作家というイメージが浮かぶ¹⁾。氏の処女作を始め初期を代表する四つの作品は以下である。

『刺青』は谷崎の短い短編小説で、1910年(明治43年)11月、雑誌『新思潮』(第2次第3号)で発表された氏の処女作でありながら代表作でもあった。(発表は『誕生』の方が先である)『刺青』には美しい女性の皮膚や足に対するフェティシズム²⁾と、それに耽溺する男など、谷崎の全作品に共通するモチーフが見られる。谷崎文学の初期に登場する主人公の女性は悪魔として扱われた。

* 大邱芸術大学校 副教授、日本近現代文学。

1) 大里恭三郎(1993)『谷崎潤一郎論』審美社、pp.7-8.

2) 谷崎が初期の『刺青』から晩年の名作『瘋癲老人日記』に至るまで、女性の足にこだわりを見せたことは有名であろう。『瘋癲老人日記』(1961年)は、若い嫁の足に踏みつけられることを夢想し、死んでゆく男性を描いた作品である。また、フェチを描いた先駆的小説でもある。足に対する偏愛は作家谷崎の異常の趣味として広く知られている。水谷昭夫(1977)『谷崎潤一郎』学灯社、pp.19.

『麒麟』は谷崎の短編小説で、1910年（明治43年）12月に雑誌『新思潮』（第2次第4号）で発表された。この作品は、特異な漢語体で書かれているが、読みやすい、興味深く、書かれている内容は非道德的でもあった。孔子の57歳の時、故郷の魯国を旅した孔子一行は衛国に來た。孔子の名声は広く隣国にも届き、靈公もまた孔子に治政の在り方を請う。しかし、それが南子には面白くない。そこで孔子を自らのもとへ引き入れようと計画を立てる。衛国は豪華な宮殿が築かれている一方、百姓が悪政に苦しんでいた。孔子は、その高名を伝え聞いた衛国の靈公に我が国に仕えようと勧め、良き政治を行うことを聞きたがった。孔子は靈公を導いていったのだが、悪政の原因は南子夫人によるものでそのことには面白く思わなかった。しかし、なんとか靈公を元に戻そうとした孔子はその試みが成功し、孔子一行は衛国を去った。南子とは、衛の国王・靈公の妻である。美人だが悪魔として知られ、靈公をその色香で惑わし、国政を自分のものとしていた。

『少年』は1911年（明治44年）6月に雑誌『スバル』で30ページに満たない短編小説ながら、強烈な印象を与えた作品でもある。また、『少年』はまさしく谷崎の文壇デビュー作『刺青』に続き、日本風と西洋風の背景を舞台とした異様な耽美的世界を描いた作品である³⁾。作品は無駄な文は一切なく、最後の光子の台詞も鬼気迫るもので迫力があった。サディストや娼婦としての妖艶な光子は少年らを完全に征服し、自分の奴隷にした。このように谷崎は感覚の世界を描くに長じ、特に女性の描写に優れていた⁴⁾。

『秘密』は1911年（明治44年）11月に雑誌『中央公論』に掲載した作品でその当時、『中央公論』は作家たちの登竜門であった。『秘密』という作品は主人公の女性化願望である。いずれも谷崎の自己愛の強い一面が垣間見える短編小説でもある。

『刺青』の〈女〉・『麒麟』の〈南子夫人〉・『少年』の〈光子〉・『秘密』の〈女〉に登場する主人公の彼女らは皆、悪女と悪魔であり、男どもは悪魔の彼女らの意のままに操縦される人物として描写されている。谷崎文学は女に始まり、女に終わる。人格を持った女性としてではなく美の現身としての女である⁵⁾。

上記に取り上げた四つの初期の谷崎作品に登場する主人公の女から見た悪魔主義⁶⁾と

3) 大江健三郎(1960.12)「志賀、谷崎と田舎の少年」『日本現代文学全集49 志賀直哉集』月報3 講談社, pp.29.

4) 中村光夫 (1994)『谷崎潤一郎論』新潮文庫, pp.22.

5) たつみ都志 (1992)『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』和泉書, pp.4-5.

6) 「悪魔主義とはサタニズム (Satanism) といい、元来、宗教的信条の一つの主義である。観念の体系であるイデオロギー的、哲学的信条や社会的現象との関係を含み、悪魔主義、悪魔崇拝とも呼ばれる。もともと19世紀末にヨーロッパに現れたもので、醜悪、怪異、怪奇、恐怖などに、美を見出したリ、追求したりする考え方である。退廃的で反社会的な傾向も見られる。ボードレールや、ワイルド、

耽美主義⁷⁾を中心に分析し、また作品に登場する主人公から理想の女性像を考察するのが研究目的である。また、谷崎文学の初期の主人公の女は悪魔とも言われる。主人公の女は遊女、芸者、舞妓、娼婦といった商売女のヒロインが多く、一般女性であっても妖婦、毒婦、淫婦、悪女などといわれるタイプの女性を好んで繰り返しヒロインにしていた。研究の方法は谷崎が書いた四つの作品を綿密に検討しそれらを引用文として使用する。谷崎がエロティズムを題材にしている、女性がより禁忌的な存在になればなるほど、その性的魅力もさらに高まるという論理で男女関係を描いた点や、美の問題までもサディズム・マゾヒズムという単純な図式だけで捉えようとしたことから、あくまでも人間関係に着目した上でのエロであったから谷崎はやはり純文学の作家であろう。

第1章 犯罪小説『刺青』と悪魔主義

日本の近代文学を代表する作家谷崎は処女作『刺青』より最晩年の『瘋癲老人日記』に至るまで、生涯飽くことなく女性の肉体美の崇拝を描き続けてきた。いわゆる耽美主義を描いたのである。まず、序論で取り上げた四つの作品から谷崎の悪魔主義と耽美主義を見る。谷崎の悪魔の中には犯罪も含まれているのであろう。例えば主人公の男が女に無理やりに麻醉剤を飲ませる『刺青』の場面がそれであろう。

しかし娘の頭は容易に上らなかつた。襦袢の袖に顔を覆うていつまでも突俯したまま、
「親方、どうか私を帰しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」
と、幾度か繰り返した。
「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」
と云いながら、清吉は何気なく娘の側に近寄つた。彼の懐には嘗て和蘭医から貰つた麻醉剤の壘が忍ばせてあつた。

(『谷崎潤一郎全集』第一巻「刺青」中央公論社、p.8.)

バイロンなどがその代表的作家である。」

平岡敏夫編 (1978 『日本文学史概説』有精堂、pp.1-30.

- 7) 「耽美主義 (aestheticism・唯美主義、審美主義とも) は、道德功利性を廃して美の享受・形成に最高の価値を置く西欧の芸術思潮である。初期の谷崎は耽美主義と呼ばれるほど、美と女性への偏愛、マゾヒズムといった捉え方をされている。」平岡敏夫編 (1978) 『日本文学史概説』有精堂、pp.1-30.

懐かしき江戸を舞台に禍々しき精神の歪みを描き出した『刺青』などは日本における犯罪小説⁸⁾となる。この犯罪の成立のために男は女を立派な器量の女にしてやる目的を持ち、彼の懐には麻醉剤を隠したのである。女の年齢は16、7才のまだ未成年者でこれもまた犯罪を犯した一つの理由にもなるであろう。非道徳的な暗黒面の中に美を求めた悪魔主義は谷崎の初期作品の『刺青』に宿っていた。

谷崎は幼少の時に観覧した歌舞伎から悪のイメージを把握し、その悪と女性の美の間に関連性を見出したのである。そして、強者と悪魔的な女と女性の美の三者に深い繋がりを感じたと考えられる。このように、強者としての女性を登場させている谷崎の作品は、『少年』にも見られる。『少年』では、女の子と男の子とが性別の区分なく遊ぶのだが、女性が男の子を支配するというマゾヒストの結末で終わる。

それはまだ人々が愚と云う貴い徳を持っていて、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁の笑いの種が尽きぬようにと、饒舌を売ってお茶坊主だの幫間だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりしていた時分であった。女定九郎、女自雷也、女鳴神、一当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も拳つて美しいからむと努めた揚げ句は、天稟の体へ絵の具を注ぎこむ迄になつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍つた。

(「刺青」p.3.)

谷崎は、「この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た」と書き、『刺青』は、人の体に刺青を彫ることに快樂を覚える男の宿願と江戸文明への憧れを表した物語である。肌に刺青をするサディズム的な興奮と刺青から得た愉快により、サディストに生まれ変わった女性と女性崇拜のマゾヒストに変わった男性がこの作品を支える重要人物である。谷崎の美は悪と一致しているという想念を歌舞伎から得た⁹⁾。

8) 「谷崎の犯罪小説として知られている作品は「柳湯の事件」「秘密」「途上」「前科者」「私」「或る調書の一節」「或る罪の動機」「白昼鬼語」「呪はれた戯曲」の9作品である。」

久松潜一・吉田精一編 (1944) 『近代日本文学辞典』東京堂出版, pp.10-18.

9) 慈母から妖婦までを表すイメージの源になったのは、谷崎の幼少期における歌舞伎の体験であった。狐と人間の婚姻を描く「蘆屋道満大内鑑」や、静御前と狐が化けた忠臣の道行きで知られる「義経千本桜」などを、九代目市川團十郎や五代目・六代目尾上菊五郎の芝居で観た体験は、幼い谷崎の心に深く刻まれた。遠藤祐 (1987) 『谷崎潤一郎 小説の構造』明治書院, pp.51-73.

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで腸れ上る肉の疼きに堪へかねて、大抵の男は苦しき呻き声を發したが、其の呻き声が激しい程、彼は不思議に云ひ難き愉快を感じるのであつた。刺青のうちでも殊に痛いといわれる朱刺、ぼかしぼり、——それを用うることを彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする為め湯へ浴つて出て来る人は、みな半死半生の体で清吉の足下に打ち倒れたまま、暫くは身動きさえも出来なかつた。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「さぞお痛みでがしょうなあ」

と云いながら、快さそうに笑っている。

(「刺青」 p.4.)

男のもとに一人の娘が使いにやってくることで物語は展開し、男は、その娘こそが、長年に渡り追い求めていた肌と悪魔性¹⁰⁾を持つことを確信する。

丁度四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清の前を通りかかった時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかげから、真っ白な女の素足のこぼれているのに気がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持って映った。その女の足は、彼に取っては貴き肉の宝玉であつた。拇指から起つて小指に終わる繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける足であつた。

(「刺青」 p.5.)

女の足は、清吉に取っては貴き肉の宝玉であつた。谷崎は美しい女性の白い小さな足を崇拝し、『刺青』『癡癲老人日記』『富美子の足』『鍵』などの作品の中に、ろうそくの蠟で作られたような真っ白で滑らか、あるいは乳鉢のような湿潤と光沢を持つ神の創造物が描写されている。¹¹⁾谷崎はこのように足フェティズムだった。すなわち、女性の足の

10) 「悪魔性に振り回され、けなされ、踏みにじられても尚、一時的な反発はあるにせよ、最終的に献身的にお仕え申し上げる。それは自発的な隷属であり、己の理想を具現化したか如き悪悪の女への騎士道の忠誠と美しき者への崇拝という関係さえ感じさせるのである。」

大谷晃一 (1984) 『仮面の谷崎潤一郎』創元社, pp.30-53.

11) 「彼女ハ又僕ガ足ノfetishistデアルコトヲ知ツテキナガラ、且彼女ハ自分が異常ニ形ノ美シイ足 (ソレハ四十五歳ノ女ノ足ノヤウニハ思ヘナイ) ノ所有者デアルコトヲ知ツテキナガラ、イヤ知ツテキルガ故ニ、メツタニソノ足ヲ僕ニ見セヨウトシナイ。」(『鍵』 p.6.)

部分に異常なまでに目と心が吸い寄せられ執着してしまった¹²⁾。

女の年頃は16、7才で顔は男の魂を弄んだ器量の持ち主であった。

年頃は漸う十六か七と思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のように物凄く整っていた。それは国中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代わったみめ麗しい多くの男女の、夢の数々から生れ出さずべき器量であった。

(「刺青」 p.6.)

男は、巻物を取り出して、暴君として名を残した古代中国の皇帝の寵妃を描いた作品を娘に見せる。妃の目の前には、処刑されようとしている男がうなだれて、妃は、泰然として、処刑を眺めていた。男は、絵を見つめる娘の顔がだんだんと妃の顔に似てくる。刺青が終わり、おとなしかった娘が前と打って変わり、悪魔になり、男を肥料にした。小娘が怖がるのは絵自体ではなく、寧ろ自分の中に隠れていた真の自分つまり悪魔の性分がその絵によって引き出されることである。

「親方、私はもう今までのような臆病な心を、さりと捨ててしまいました。—お前さんは真先に私の肥料になったんだねえ」

と、女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の音がひびいていた。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はこう云った。

女は黙って頷いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

(「刺青」 p.10.)

湯上りの娘は小娘ではなく、悪魔になり、女の背は燦爛とした。彼女が清吉の刺青により、それまでの臆病な心をさっぱり捨ててしまい、清吉を自分の肥料とみなしたところに悪魔が生まれた。絢爛とした女の背が女主人公の生まれ変わりを意味している。谷崎は歌舞伎や小芝居から得た毒婦・悪婆のような世界を『刺青』に反映して男性を征服する悪魔的なマゾヒストの女性つまり、強者としての女を造形している。『刺青』は、谷崎が幼少時代から楽しんできた草双紙や歌舞伎の伝統から生み出された作品であり、江戸文学の美と悪

12) 佐藤隆信 (2005) 『文豪ナビ谷崎潤一郎』新潮文庫, pp.20-21.

の伝統の奇妙な蘇生とも言える。歌舞伎から毒婦的な女＝悪魔的な女という概念とその中で美を抽出した谷崎は、それを『刺青』において強者の美として具現化したのである。谷崎は歌舞伎や芝居や草双紙に表れている媒介によって、形成された強者としての美をよく反映している。『麒麟』という作品には美と悪とは一致し、「美しい者は強者である」という主題が広がっている。明治・大正・昭和の三代にわたる谷崎の長い文学活動の要諦を一言で言えば「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」という美意識である。男たちを踏み付け、破滅させ、その屍骸を肥やしとして自分の美を輝かせる妖婦と変身する。13)美的な女性が男性を征服するという強者の登場である。これが谷崎文学の特徴である。

第2章 『麒麟』の南子夫人と悪魔主義

『麒麟』の南子夫人は、『刺青』の〈女〉の性質を持ち、一つ一つ珍奇な杯に酒を酌んで、一行にすすめた。酒は、人間の嘗て味はぬ天の歡樂を伝えた甘露の如くであった。夫人はまた肉の皿の一つ一つを一行にすすめた。孔子は故郷の魯の国から伝道の途に上がる所から始まる。

西暦紀元前四百九十三年。左丘明、孟軻、司馬遷筆の記録によれば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始め、孔子は数人の弟子達を車の左右に徒へて、其の故郷の魯の国から伝道の途に上つた。

(『谷崎潤一郎全集』第一巻「麒麟」 p.15.引用)

史記や論語を材料にし、衛の靈公をめぐる、その夫人南子と聖人孔子とが、その心を奪うことを争ったが、孔子が説教した徳も妖婦南子の美には及ばなかったという作品の内容である。

谷崎が漢詩文に親しみつつも、漢籍の権威から離れて自由に創作したものがこの『麒麟』である14)。

また、精神と肉体、道徳と官能美との闘争において、南子の勝利を歌った谷崎的テー

13) 佐藤隆信 (2005) 『文豪ナビ谷崎潤一郎』新潮文庫, pp.22.

14) 西原大輔 (2003) 『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論社, pp.62-65.

マの確立だった。または孔子の精神世界と妖婦南子の肉の世界とはどこまでも並行していて、決して交わることはないとも考えられるのである。こういうことで谷崎は、肉の世界の自立性を語っているようである。実際に孔子と南子とのあいだに、何が起きたのかは知らない。しかしこの一文に興味を持ち、そこから物語を作り出したのが谷崎である。『麒麟』と題されたその短編には、南子が多様な方法を使って孔子を籠絡しようとする模様が描かれている。幾種もの香を炊き、酒宴を催し、女官をはべらせ、そのたびに孔子に向けて色気を浮かべる南子。そんな彼女が孔子に見せたのは、刑場でもがき苦しむ罪人たちのむごたらしい姿である。みな裸にむしられ、なかには、鼻を削がれ、両足を断たれたものもある。南子の嫉妬を買った理由で捉えられた女だ。そして「あの罪人達を見たならば、先生も妾の心に逆らう事はなされるまい」と、脅す。『麒麟』の南子は悪魔性を持っているが、男性を征服して「強者としての美」を発揮する。『麒麟』は道徳である孔子と官能である南子夫人を対立的に登場させて、二人の争いによって展開される美の世界を描写したのが特徴である。孔子は、享楽に溺れる靈孔に道徳的真理を教えて墮落の世界から救おうとするが、その甲斐なく、南子夫人の魅力的な誘惑に靈孔は征服されてしまい、享楽人として生きていく。このような靈公の態度は、南子夫人の孔子への挑戦を促す契機になる。孔子は徳と色は両立しないと思い、結局、衛という国を離れていく。孔子が衛という国を発ちながら「吾未見好徳如好色者也」という。『刺青』の〈女〉・『麒麟』の〈南夫人〉・『少年』の〈光子〉・『秘密』の〈女〉、など谷崎の初期作品は、いずれも女性の美に傾倒し、女性の悪魔性の前に虜となって、女性を崇拜するマゾヒストの男性によって、具象化したものである。ところが、『麒麟』では、谷崎の作った典型的な男性像が見られるものの、異なる様相も現れた。それは女性の悪魔的な要素にも一切揺れない孔子の態度がそれである。このような男性像や強者としての女性による美の描写は谷崎文学の特徴である。

「帳の彼方は庭に面する階であつた。階の下、芳草の青青と萌ゆる地の上に、暖な春の日の照らされて或は天を仰ぎ、或は地につくばひ、躍りかゝるやうな、鬨ふやうなさまざまな形をした姿のものが、(省略)其の光景を恍惚と眺め入る南子の顔は、詩人の如く美しく、哲人の如く厳肅であつた。」

(「麒麟」p.26.)

南子の美の質を明確に現わした部分であり、その顔は、詩人の如く美しく、哲人の如く厳肅であつた。後の谷崎文学の性倒錯(マゾヒズム)の女性の世界を垣間見ることができ

る。そしてそれは谷崎の文壇登場の最初の一年の短篇小説『刺青』の〈女〉・『麒麟』の〈南子夫人〉・『少年』の〈光子〉・『秘密』の〈女〉、などの随所に見出しうることもいうまでもない。その夕方、夫人は殊更美しく化粧して、身を横へて持っている、戸をほとほと叩く者があり、

「私はお前を憎むで居る。お前は恐ろしい女だ。お前は私を亡ぼす悪魔だ。しかし私はどうしても、お前から離れる事が出来ない。」

(「麒麟」p.27.)

と南子を悪魔として見た霊公の声はふるえた。谷崎の悪魔主義の最後の末尾において可能になった。『悪魔』（『中央公論』明治45年2月）執筆以前の谷崎が悪魔主義と言われる小説群と並行して、彼の青春性を主題化した写実的な小説を書きついでいたことはよく知られている¹⁵⁾。結論的に言えば、この作品を通して悪魔誕生の事態と密接な関連性を持ち、現像の女性像を浮び上げる『刺青』の〈女〉・『麒麟』の〈南子夫人〉・『少年』の〈光子〉・『秘密』の〈女〉、彼女らは皆、悪魔であり、男どもは彼女らの意のままである¹⁶⁾。

15) 「『悪魔』は強迫観念に支配された人間の心理を真正面から扱った作品である。主人公の佐伯が帝大に入るために汽車に乗って上京する場面から始まる。そこで彼は「さながら自分の衰弱した魂を脅喝するやうな勢で轟々と走つて行く車輪の響の凄じさ」に恐怖し、頭に血が上った状態で「あっ、もう堪らん。死ぬ、死ぬ」と叫び、車室の窓枠にしがみつく。佐伯は叔母林久子の家の二階に住み込むが、学校はさぼりがちで、部屋に籠って煙草を吸い、ウイスキーを飲み、だらけてばかりいる。過去の放蕩で肉体が疲労しているため、女遊びをしに行くこともない。叔母の娘すなわち従妹の照子は、そんな佐伯のことが気になるようで、しょっちゅう二階にやって来る。立派な肉体を持つ彼女がそばに来ることを佐伯は迷惑に思っている。照子から漂ってくる性的な魅力に心を惑わせられる男を描いた作品である。男は照子に対する愛を実現することができない。そのかわりにその代替行為に走る。照子が鼻を噛んだハンカチを秘かに持ち歩き、機会をみてはそれを舂めるのである。鼻汁の何とも言えない嫌なにおいが男の性欲をますます掻き立てる。鼻汁を舂めることはセックスの代替行為なのであり、マスターベーションのようなけちなものではない。」

森安理文（1983）『谷崎潤一郎—あそびの文学—』国書刊行会，pp.40-70.

16) 「谷崎の悪魔主義の作品としては出世作となった『刺青』がその代表的なものであろう。そのほか、退廃的な作品としては「異端者の悲しみ」が挙げられ、自伝的小説といわれている。倒錯的な作品として『秘密』があり、怪異・怪奇な作品としては「人面疽」がある。「少年」はツルゲーネフの「初恋」にシチュエーションがよく似ていて、マゾヒズムのなところも存在する。登場人物である子どもたちが遊んでいるうちに、サド・マゾ的な支配・被支配の感覚におぼれていく様を描いていた。」

千葉俊二（1979）『谷崎潤一郎』明治書院，pp.31-38.

第3章 『少年』に現れた悪魔主義のサディスト

『少年』に見られる西洋風の主人公の女のサディストと男のマゾヒストは悪魔主義の良い例でもあろう。内容は20年ばかり前、主人公の私が10才ぐらいだった頃、同級生で大金持ちながらいつも付き添いの女中を片時も離さず意気地なしと言われていた坊ちゃんの信一は、私を自宅に招く。家で気取る信一は学校とは違って変わった内弁慶ぶりで、仙吉を盗賊に仕立てて拷問したり、妾の姉である光子をいじめたりする。父の妾の子である姉の光子、馬丁の息子で学校では餓鬼大将の仙吉と私を信一の都合のいいように使って様々な芝居に耽り、私たちもそうされることに快感を覚えるようになった。

もう彼れ此れ二十年ばかりも前にならう。漸く私が十ぐらで、蛸殻町二丁目の家から水天宮の有馬学校へ通つ居た時分——人形町通りの空が震んで、軒並の商家の紺暖簾にぼかぼかと日があつて、取り止めのない夢のやうな幼心に何となく春が感じられる陽気な時候の頃であつた。或るうらうらと晴れた日の事、眼くなるやうな午後の授業が済んでだ墨らけの手に算盤を抱へながら学校の門を出ようとすると、

(『谷崎潤一郎全集』第一巻「少年」中央公論社、p.31.)

信一は入学した当時から尋常四年の今日まで附添人の女中も側から離れたことのない評判の意気地なし、弱虫だの泣き虫だのと悪口をきいて遊び相手になる者のない坊ちゃんであった。そして段々ひどい役目は光子に向かうようになっていき、ある日信一が歯医者に行つて留守の時、私と仙吉は光子がピアノを習っている洋館に自分たちを入れるように光子に承知させるため、光子を仰向けに寝かせて、その頭と腰に腰掛けて人間縁台として、光子をいたぶって遊ぶのである。17) 窒息しかかった光子は彼らを深夜に洋館に入れることに同意し、あらかじめ光子と仙吉が洋館に忍び込み、後で私が訪ねていくことになる。決められた時間に着くと人影はなく、鍵の開いているドアを通して中に入ると、そこには実物の大蛇がとぐろを巻いていた。彼らは、草双紙の挿画を夢

17) 「信一は我儘いっぱい、ぶつ、縛る、など残酷な遊びをはじめ。栄は草履で顔を踏みにじられ快感を覚え、身も心も信一の傀儡となることに喜びを感じる。そのうち三人に信一の姉で妾の子である光子を加え、犬にされる、足を舐める、小刀で傷をつけるなどの遊びに興じるようになる。そんな日々が続く中、今までいじめられ役だった光子は蠟と蛇で脅して、栄と仙吉にこれからは自分の言う通りにする様命ずる。栄、仙吉に取り押さえられ傲慢な信一も大人しくなる。三人は奴隷として光子に仕えるようになる。これは心理的なエロティシズムよりも、蠟燭や縄による責め、顔面陵辱、咀嚼した食物の強制摂取、人間の家畜化、白酒などのスカトロジー、首切りといった、肉体的なエロティシズムが全面的に押し出されていたのである。」野口武彦 (1973) 『谷崎潤一郎論』中央公論社、pp.53-101.

中になって見ていたり女主人公光子を虐めたりしている。ところが、このような男女の関係は、西洋館にかけてある絵によって逆転される。それはその絵には光子の悪魔的なサディストの要素が移されているからである。男たちに虐められていたマゾヒストの光子が、草双紙の挿画に描かれているサディスト女と同じく悪魔的な女性に変わり、少年たちを征服し、女王のように生きていくのである。芝居や草双紙¹⁸⁾に現れている「強者」＝「悪魔的な女」＝「女性の美」という図式によって、『刺青』の主題「美しい者は強者である」という概念が成立する。

信一は袋戸棚から草双紙を引き擦り出して、男女の姿が生いきとした目鼻立ちから細かい手足の指先まで、動き出すように描かれてる絵本を見せてくれた。

何十年立つたか判らぬ木板刷の極彩色が、光沢も褪せないで鮮やかに匂つてる美濃紙の表紙を開くと、臭いケバケバ立つて居る紙の面に、旧幕時代の美しい男女の姿が生いきとした目鼻立ちから細かい手足の指先まで、動き出すやうに描かれてる。

(「少年」p.36.)

この部分は、『刺青』の清吉が、真の己を見出さんと娘に見せた二幅の画題になっている部分と重なっている。そして、その画幅は、「古の暴君紂王の寵妃末喜を描いた絵」と「肥料」というのである。清吉は暇を告げて帰ろうとする娘の手を取って、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先づその一つを娘の前に繰り展げた。

それは古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であつた。瑠璃珊瑚を鏤めた金冠の重さに得堪へぬなよやかな体を、ぐつたり匂欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがへし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男と眺めて居る妃の風情と云ひ、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛ひつけられ、最後の運命を待ち構へつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云ひ、物凄い迄に巧に描かれて居た。娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫へた。怪しくも其の顔はだんだんと妃の顔に似通つて来た。娘は其処に隠れたる真の「己」を見出した。

(「刺青」p.6.)

18) 「谷崎は東京日本橋に生まれ、裕福な家庭で家には草双紙や錦絵があふれていたという。その幼少の時代が美しいものを追い求める「耽美主義」といわれる。美にふけり陶醉するような文章は「刺青」をはじめとする小説に現れていた。また、日本の美や伝統をこよなく愛し、「細雪」などは古典の絵巻物のような美しさがある。」河上徹太郎(1966)「谷崎潤一郎」桜楓社, pp.20-80.

彼は更に他の一本の画幅を展げた。それは「肥料」と云ふ画題であつた。画面の中央に、若い女が楼の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身邊を舞ひつゝ、凱歌をうたふ小島の群、女の瞳に溢れたる抑へ難き誇りと歡びの色。それは戦の跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んで居た何物かを、探りあてたる心地であつた。

(「刺青」 p.7.)

これらの図柄は余りにあらわに作者の意図を説明するもので、作中でも余りすぐれたイメージとはい難いが、そのためにかえって一篇の主題を文字通り絵解きするものとなっている。

「さあもう二人共死骸になつたんだからどんな事をされても動いちやいけないよ。此れから骨までしやぶつてやるぞ」
(「少年」 p.42.)

上記に叙述されているように、骨までしやぶつてやる少年たちの遊びは、マゾヒズム、サディズムの原型といつてもよい。そして、谷崎文学における主人公の多くはマゾヒストあるいはそれに近い傾向の男性である。この作品ではまた、光子が良家のお嬢さまではあるけれども、妾の娘として設定されている点にも注目すべきであろう。

今度は三人に信一の姉の光子をまじえ、孤退治の遊びをする。

「あッ、坊ちやん坊ちやん、孤ごつこをしませんか」

仙吉がふと面白い事を考へ府いたやうにかう云ひ出した。私と仙吉と二人の田舎者が孤退治に出かけると、却つて女に化けた光子の孤の爲めに化かされて了ひ、散々な目に会つて居る所へ、侍の信一が通りかゝつて二人を救つた上、孤を退治してくれると云ふ趣向である。

(「少年」 p.47.)

光子の孤にだまされた仙吉と私とは、光子の口で食いちぎつたあんころ餅だの、鼻汁で練り固めた豆炒いだの、痰や、つばきを吐きこんだ白酒だのを「おいしい、おいしい」と言って飲み食いする異常な遊びは平凡とは言えないだろう。

こつう、ふしぎに楽しい遊びが一ヶ月ほど続いた後、ある日、昼の遊びに仙吉と「私」とのために緑台の代わりにされていじめられていた光子だが、夜、不思議な雰囲気西洋館

内での遊びとなると、形勢は逆転、洋服姿で甘い香りを放つほどあでやかな光子のために、仙吉は奴隷のごとく手足を縛られ、両肌抜いて顔を仰向け、額には燃え盛るローソクを立てて燭台代わりにされている。

光子は蠟燭の下を指さした。見ると燭台だと思つたのは、仙吉が手足を薄られて両肌を脱ぎ、
(「少年」 p.61.)

この部分が谷崎文学の悪魔主義の一つであるマゾヒズム文学として扱われながらサディズムの視点とも見る。谷崎自身は果たして悪魔主義のマゾヒストなのか。あるいは悪魔主義のサディストであるのか。それとも彼はノーマルなのか。これらの問題はまだ解明されていなく、今後の叙述から明確しすべきの課題でもあろう。谷崎はその文学の出発の当初に、まず悪魔主義のサディズムの典型として、前述した『刺青』の若い刺青師の心をあげた

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜がんで居た。(以下、前述の部分
を参考とする)

(「刺青」 p.4.)

この『刺青』の描写は、明らかに悪魔主義のサディズムの心理機制に出発しながら、主人公の清吉がある女を発見し、その女体に悪魔主義のサディスティックな行為を加えているうちに、やがて彼の心理は悪魔主義のマゾヒスティックな傾向に変わってゆく。一方、清吉によってその悪魔主義のサディズムを呼びさまされた女は、(または「少年」の光子)『刺青』の完成とともに、悪魔主義のサディスティックな女に生まれ変わり、清吉のサディズムは(または「少年」の信一、萩原の栄ちゃん、仙吉)女(光子)の命令に服従するというマゾヒズムに変化する。

其の明るる日から、私も仙吉も光子の前へ出ると猫のやうに大人しくなつて跪き、たまたま信一が姉の言葉に逆はうとすると、忽ち取つて抑へて、何の会釈もなくふん縛つたり撲つたりするので、さしも傲慢な信一も、だんだん日を経るに従つてすつかり姉の家来となり、家に居ても学校に居る時と同じやうに全く卑屈な意気地なしと變つて了つた。三人は何か新しく珍らしい遊戯の方法でも発見したやうに嬉々として光子の命令に服従し、「腰掛けにおなり」と云へば直ぐ四つ這ひになつて背を向けるし、「吐月峰におなり」と云へば直ちに畏まつて口

を開く。次第に光子は増長して三人を奴隷の如く追ひ使ひ、湯上りの瓜を切らせたり、鼻の穴の掃除を命じたり、Urineを飲ませたり、始終私達を側へ待らせて、長く此の国の女王となつた。西洋館へ其れ切り一度も行かなかつた。彼の青大将は果して本物だか安物だか、今考へて見てもよく判らない。

(「少年」 p.63, p.64.)

『刺青』『麒麟』『少年』の系統は男が奴隷のように女性拝跪の結末で、加虐、被虐を楽しむ悪魔の倒錯心理はさらに表面に押し出され、谷崎的恋愛の原型ができあがったのである。

『少年』はだれしもが幼少期の名残の中にある要や汚れた遊びへの嗜好を基づいた作品であり、強いアリティと普遍性を持つ作品でもある。つまり、谷崎自信がある意味では子供だったので、この子供らしさは小児を題材にしない場合にも、おのずから『少年』の性格に現れていたのである。¹⁹⁾

第4章 女性化願望の『秘密』と悪魔主義

『秘密』には、女装、秘密、盲目、閉ざされた妾宅での密会など強烈な色彩の織糸がふんだんに織り込まれている。それらの色彩はその強烈さによって、おなじみの観念的世界とあの異常の世界に見えるものを作り上げる。²⁰⁾しかし、それはテキストが巧みに用意した戦略であり、その織糸の色彩が強であることによって蔭に隠れてしまうもう一つの織糸が、かえってそれを巧みに取り込んでむしろ現実に向けて開かれた世界を織り成しているのである。そうした逆説的な転換を可能にするその織糸こそが語りの役割で、ここではテキストがいかに現実的な世界を開いていくかを見ながら、潜んでいる理想の女性像を見る。始めの部分は以下である。

其の頃私は或る気紛れな考から、今迄自分の身のまわりを裏んで居た賑やかな雰囲気や遠ざかつて、いろいろの関係で交際を続けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適当な隠れ家を捜し求めた揚句、浅草の松葉町邊に真言宗の寺のあるのを見附け

19) 中村光夫 (1994) 『谷崎潤一郎論』、新潮文庫, pp.23.

20) 「秘密」は女装して街を歩くことに喜びを感じる男の話である。女装するトランスジェンダーをテーマに取り上げたのは恐らく谷崎が最初ではないだろうか。橋木芳一郎 (1975) 『谷崎潤一郎(作家と女性)』、汐文社, pp.18-122.

て、やうやう其処の庫裡の一と間を借受けけることになった。

(『谷崎潤一郎全集』第一巻「秘密」中央公論社、p.121.)

『秘密』という作品は、かつて気まぐれに惹き起こしたある転換を、私が語り出すところから始まる。ここで語られる私の行動様式とは、それまでの生活範疇を離れ、生活方法を変化させることである。21)具体的には、賑やかな雰囲気避け、隠遁生活を始めようとするのである。しかしそれは、隠遁という意味から思い浮かべられるような、落ちついた普通の生活ではない。私はむしろ、極度の刺激が得られるような異常の生活を望む。そうすることで日常性を断ち切ろうとするわけであるが、風景の裏側に廻って見るという考えは既に前作『少年』に見られる22)。

夜の九時頃、寺の者が寝静まってしまうとウイスキーをあおって酔いを買った後、勝手に雨戸を引き外し、墓地の生け垣を乗り越えて散歩に出かけた。ある晩、三味線掘の古着屋で、小紋を散らした女物の袷が目についてから、急にそれが着て見たくてたまらなかった。夜が更けてがらんとした寺中がひっそりした時、私はひそかに化粧を始め、べつと練りお白粉をなすり着けた容貌は、少しグロテスクに見えたが、皮膚のよろこびは、格別であった。松葉町のお寺の近傍は、そのうちで一番奇妙な町であった。六区と吉原を鼻先に控えてちょっと横丁を一つ曲った所に、さびしい、すられたような区域を作っているのが非常に私の気に入ってしまった。隠遁した目的はアーティフィシャルなMode of lifeを見出して見たかったのである。

隠遁をした目的は、別段勉強をする為めではない。其の頃私の神経は、刃のの擦り切れたやすりのやうに、鋭敏な角々がすつかり鈍つて、余程色彩の濃い、あくどい物に出逢はなければ、何の感興も湧かなかった。(中間省略) 物好きな、アーティフィシャルなMode of lifeを見出して見たかったのである。

(「秘密」 p.123.)

21) 「私は周囲との関係を拒否し、ある寺で隠遁生活を始める事が事件の始まりである。普通の刺激に慣れ鈍った神経を奮い戦かせるため、不思議で奇怪な事を求める。行動を秘密にするだけでもミステリアスな色彩を得られる。私は古着屋で女物の着物を見つけ、急にそれを着てみたくなった。それから毎晩、女装して出掛けるようになった。そんなある日、映画館で、昔自分が捨てた本当の名さえ知らぬ女を見かけ、気を惹かれ、こっそり手紙を渡す。家に帰り服を脱ぐと女から返事の手紙が出てきて、二人は会う事になる。翌日、私は約束の場所に赴くと、目隠しをされ、人力車に乗せられ、女の家連れて行かれる。どこにあるか分からない場所で逢引は繰り返される。私は好奇心が押さえられなくなり、一度だけ一瞬目隠しを外してもらう。私はその場所がどこだか分かってしまい、女の身元も知ってしまう。私はもう秘密などという手ぬるい快感には満足しなくなってしまった。」

河野多恵子 (1976) 『谷崎文学と肯定の慾望』 文芸春秋, pp.11-112.

22) 宮内淳子 (2001) 『谷崎潤一郎-異故往還-』 国書刊行会, pp.11-112.

私は隠遁した後、生活を変えるために、まず下宿の部屋を、自己の理想にふさわしくしつらえる。

それから私は、今迄親しんで居た哲学や芸術に関する書類を一切戸棚へ片付けて了つて、魔術だの、催眠術だの、探偵小説だの、化学だの、解剖学だの、奇怪な説話と挿絵に富んでる書物を、さながら上用干の如く部屋中へ置きまして、寝ころびながら、手あたり次第に繰りひろげては耽読した。其の中には、コナンドイルのや、ドキンシイのThe Sign of Fourや、アラビアンナイトのMurder, Considered as one of the fine artsのやうな伽嚩から、仏蘭西や不思議なSexuologyの本なども交つてゐた。

(「秘密」 p.125.)

これは私の理想を超越した幻想に近い書物である。また他に、寺院にある仏画、香炉の煙などもあいまって、私の幻想は一層かきたてられる。これらのものは、私の意識の中の物事同様に、個別に存在するのではなく、渾然と一体になってひとつの気分を作り出す。

夜が更けてからんとした寺中がひっそりした時分、私は密かに化粧を始め、べつとりと練りお白粉をなすり着けた容貌は、少しグロテスクに見えたが、皮膚の喜びは格別であった。

文士や画家の芸術よりも、俳優や芸者や一般の女が、日常自分の体の肉を材料として試みてる化粧の技巧が、遙かに興味が多いことを知つた。

(「秘密」 p.126.)

目隠しをされた私は、T女が持つ「見せる部分」と「見せられない部分」という二面性を知らない。谷崎の初期の作品主人公の女はほとんど悪魔的な娼婦型（『母を恋ふる記』除外）であり、サディストとしてマゾヒストである男性を踏みこむことにより、主人公の男が肉体的な苦痛から異常な快楽を得るように設定されている。谷崎の小説の中で、主人公が女装するのは『秘密』以外にも『翫間』²³⁾『仮装会の後』などがあるが、『秘密』という作品は主人公の女性化願望である²⁴⁾。雨曇りのしたうす暗い晩であった。私の

23) 「翫間」は他人に虐待されることに喜び（マゾヒスト）を感じる道化師の話である。翫間と言うのはもともと、他人に馬鹿にされながら、人様を喜ばすことが商売なのだが、その馬鹿にされるということが、商売の都合ではなく、本当の喜びになってしまった、そんな男の業のようなものを描いたのがこの作品なのである。元来、翫間というには宴席やお座敷などの酒席において主や客の機嫌をとり、自ら芸を見せ、さらに芸者・舞妓を助けて場を盛り上げる職業で歴史的には男性の職業である。

塚谷晃弘（1991）『谷崎潤一郎 その妖術とミステリー性』沖積舎，pp.13-33.

体の血管には、自然と女のような血が流れ始め、男らしい気分や姿勢はだんだんなくなって行くようであった。自己の肉体への関わりが質が変化したために、私の肉体は、従来の男として意味づけを逃れ、技巧の側からの意味づけを受け入れるのである。

私は自分で自分の手の美しさに惚れ惚れとした。此のやうな美しい手を、観察に持つてゐる女と云ふ者が、羨ましく感じられた。

(「秘密」p.127.)

この部分は『痴人の愛』に描写された白の誘惑と同等であろう。大理石のヴィーナス像にも似たナオミの白い肌、燃える光のように追って来る白い肌である。それは淫婦の肉魂の真白な肌への惑溺ではなく、靈妙な白への慕情であり跪座である。白は色彩の不在であり、無である。炸熱の炎のような白のなかに、無に直面し、内部の闇に直面した人間の不安が結晶している。白は肉体の無化である。

いつも見馴れて居る公園の夜の騒擾も、「秘密」を持つて居る私の眼には、凡べてが新しかつた。何処へ行つても、何を見ても、始めて接する物のやうに、珍しく奇妙であつた。

(「秘密」 p.128.)

秘密とは、まず関係の再編である。社会に生活する以上、我々は、社会の側からの意味づけを、望むと望まざるとに関わらず受けずにはいられない。私は、女装によってその秩序づけを逃れようとしたものであるが、そればかりでなく、自己の側から社会の方を意味づけようとする。現実とも幻覚とも区別のつかないLove adventureの面白さに、私はそれから毎晩のように女の許に通い、夜半の二時頃まで遊んでは、また眼かくしをして、雷門まで送り返された。ある晩、私はとうとうたまたまなくなって「一寸でも好いから、この眼かくしを取つてくれ。」と女にせがんだ。

「何卒そんな我が儘を云はないで下さい。此処の往来はあたしの秘密です。此の秘密を知られ、ばあたしはあなたに捨てられるかも知れません。」

「どうして私に捨てられるのだ。」

「さうなれば、あたしはもう『夢の中の女』ではありません。あなたは私を恋して居るよりも、夢の中

24) 「谷崎文学には数多くの謎がある。例えばエディプス・コンプレックス、マゾヒズム、フェティシズム、窃視症、糞尿愛、女性化願望などがそれであろう。また、異常性欲と異常心理、江戸っ子でありながら関西を愛するようになったこと、西洋崇拜・イデア論から日本回帰し、また西洋崇拜に戻ったことなどは不思議であろう。」山本健吉 (1950) 『谷崎潤一郎』河出書房, pp.3-39.

の女を恋して居るのであるもの。」

(「秘密」p.136.)

女はあくまで、男に捨てられないために、男の幻想を生み出す手伝いをしているのであり、自己の自由にならないという点においては、強者の立場であるどころか、男の幻想の奴隷としている。

『幫間』『仮装会の後』などとは違い、『秘密』の主人公には女装だけじゃなく化粧を伴う女性化願望が見られるからである。主人公の悪魔的な娼婦性が『秘密』という作品の特徴として取り上げられる。倒錯的な作品として、『秘密』は主人公の男が、遊び仲間や周囲の雑音から逃れるために、東京のとある場所に部屋を借りて隠遁する。ある朝、私は雷門の角へ立って眼をつぶりながら二三度ぐるぶると体を廻した後、この位だと思ふ時分に、と同じ位の速度で一方へけ出して見た。

私の心はだんだん「秘密」など、云ふ手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もつと色彩の濃い、血だらけな歓楽を求めるやうに傾いて行つた。

(「秘密」p.140.)

以上のように、『秘密』は、本来折り合うことのないはずの現実に、自己の幻想を構築しようとしては崩壊させてしまう物語と見なすことができる。また、「『秘密』は、現実の読み替えという、物と意味との関係にかかわる物語でもない、虚構のものごとに現実性を与える物語でもある。言い換えれば、この作品は、男女の関係が単に肉体的な性欲という自然性においてではなく、虚構によって成立するという物語を描いているのであり、心理というものが単に現実から遊離しやすいものであるばかりでなく、逆に現実を領略する欲望をもち得るといふ、人間の一面を提出してもいるのである。

結論

谷崎は新人作家として華やかに日本の文壇にデビューした。彼の作品の中に現れている美の世界は文壇に鮮やかな衝撃を与え、従來の日本文学にはあまり見られなかった特質な主題であった。それは、自然主義全盛期の文壇や、一般文学愛好者の目をみはらせるのに十分であった。その背景には、永井荷風が谷崎の処女作『刺青』について、「肉

体的恐怖から生ずる神秘幽玄」、「全く都会的たる事」、最後に「文章の完全なる事」と、谷崎文学を極賛したことが谷崎の文壇デビューへの大きな後押しになったという事情もあった。『刺青』とともに永井荷風から高い評価を受けた作品は、『麒麟』である。

『麒麟』にも荷風が指摘している「肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄である肉体上の惨忍から反動的に味ひ得る痛切なる快感である」という世界がよく現れている。『刺青』には美と悪とは一致し、「美しい者は強者である」という主題が広がっている。明治・大正・昭和の三代にわたる谷崎の長い文学活動の要諦を一言で言えば「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」という美意識であろう。

『刺青』に見られる娼婦型の女性サディストと男性マゾヒスト、『麒麟』に見られる南子夫人のサディストと衛国の靈公のマゾヒスト、王妃の南子は、一国を自らの所有物のように扱う暴虐な絶対権力者であり、その権力は自らの美貌と性的魅力をもって靈公の心を支配することによって得られたものであった。『少年』に見られるサディストや娼婦としての妖艶な光子と少年らのマゾヒスト、『秘密』に見られる西洋風の娼婦型の人妻サディストと男性マゾヒスト。サディストとしてマゾヒストである男性を踏みつけることにより、主人公の男が肉体的な苦痛から愉快を得るように設定されている。四つの作品の共通性はいずれも谷崎の自己愛の強い一面が垣間見える短編小説である。このように谷崎が初期の短編小説群を通じて人間の肉体性の美や性欲そして悪魔などと言ったものにこだわっていたことがわかる。つまり、谷崎文学は美と悪とエロスの三位一体である。

上記に述べたように谷崎は女性を美と悪との権化と見、これを拝跪する彼の作品の基本概念がはたして現実の人間の生きるに堪える論理であろう。

谷崎の理想の女について、前期の古典型や西洋風の娼婦型、後期の良家型、良妻型などが見られる。さらに、谷崎の女性像のもう一つの型は、母性への思慕となって現れるのである。初期の『母を恋ふる記』が母性思慕の現れである。初期の悪魔主義、中期のエキゾチシズムの美、後期の日本伝統の美という分け方である。ほかに、作風上から見れば、培養期（明治43年～大正5年）、確立期（大正6年～大正15年）、完成期（昭和2年以後）という分け方もある。ところで周知のとおり谷崎には永遠の女性像から女性崇拝の傾向を見ることができ、谷崎自身が語るところによればその「胚胎するところは遠く、祖父も父もフェミニストの性向が強かったらしい。そのうえ父は母に文字通りぞっこん惚れこんでいて、三十年の結婚生活を通じて、離れて生活したのはほんの数えるほどに日数しかなかったといわれている。その母は娘の時分わりあい裕福に暮らしたのでそうとうに教育があった。

【参考文献】

- 谷崎潤一郎論 (1958) 『谷崎潤一郎全集 第一巻』中央公論, pp.32-37.
 大里恭三郎 (1993) 『谷崎潤一郎論』審美, pp.7-52.
 水谷昭夫 (1977) 「谷崎潤一郎」学灯社, pp.10-49.
 大江健三郎(1960) 「志賀、谷崎と田舎の少年」『日本現代文学全集49 志賀直哉集』月報3、講談社, pp.29.
 中村光夫 (1994) 『谷崎潤一郎論』新潮文庫, pp.10-52.
 たつみ都志 (1992) 『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』和泉書院, pp4-15.
 平岡敏夫編 (1978) 『日本文学史概説』有精堂, pp.1-40.
 久松潜一・吉田精一編 (1944) 『近代日本文学辞典』東京堂出版, pp.10-119.
 遠藤 祐 (1987) 『谷崎潤一郎 小説の構造』明治書院, pp.51-73.
 大谷晃一 (1984) 『仮面の谷崎潤一郎』創元社, pp.30-53.
 西原大輔 (2003) 『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論社, pp.62-107.
 佐藤隆信 (2005) 『文豪ナビ谷崎潤一郎』新潮文庫, pp.10-128.
 森安理文 (1983) 『谷崎潤一郎 ---- あそびの文学』国書刊行, pp.40-70.
 千葉俊二 (1979) 「谷崎潤一郎」明治書院, pp.31-38.
 野口武彦 (1973) 『谷崎潤一郎論』中央公論社, pp.53-101.
 河上徹太郎 (1966) 「谷崎潤一郎」桜楓社, pp.20-80.
 橋本芳一郎 (1975) 『谷崎潤一郎(作家と女体)』汐文社, pp.18-122.
 河野多恵子 (1976) 『谷崎文学と肯定の欲望』文芸春秋, pp.11-112..
 宮内淳子 (2001) 『谷崎潤一郎-異故往還-』国書刊行会, pp.10-108.
 塚谷晃弘 (1991) 『谷崎潤一郎 その妖術とミステリー性』沖積舎, pp.13-33.
 山本健吉 (1950) 『谷崎潤一郎』河出書房, pp.3-39.
 明里千章 (2001) 『谷崎潤一郎 -自己劇化の文学-』和泉書院, pp.2-3.
 大久保典夫 (1975) 「谷崎潤一郎における<戦後>」冬樹社, pp.31-41.
 橋本芳一郎 (1967) 「谷崎潤一郎作品年表・参考文献目録補遺」東京学芸大学紀要18集, pp.12-33.
 野口武彦 (1973) 「海外における谷崎潤一郎」『新潮』pp.21-53.
 橋本芳一郎 (1968) 「谷崎潤一郎初期作品の交合」『国語と国文学』pp.30-73.
 渡辺たをり (2003) 『祖父 谷崎潤一郎』中央文庫, pp.51-77.

논문 투고 일자 : 2016. 06. 30.
논문 심사 일자 : 2016. 07. 25.
게재 확정 일자 : 2016. 07. 27.

<要旨>

谷崎潤一郎の『刺青』『麒麟』『少年』『秘密』に於ける女性
-悪魔主義と耽美主義を中心に-

吳 秉 禹

谷崎文学の初期の主人公の女は悪魔と言われる。『刺青』には美と悪とは一致し、「美しい者は強者である」という主題が広がっている。『麒麟』に見られる南子夫人のサディストと衛国の霊公のマゾヒスト、『少年』に見られるサディストや娼婦としての妖艶な光子と少年らのマゾヒスト、『秘密』に見られる西洋風の娼婦型の人妻サディストと男性マゾヒスト。四つの作品の共通性はいずれも谷崎の自己愛の強い一面が垣間見える短編小説である。このように谷崎が初期の短編小説群を通じて人間の肉体性の美や性欲そして悪魔などと言ったものにこだわっていたことがわかる。つまり、谷崎文学は美と悪とエロスの三位一体である。

"A tattoo" Woman of the "giraffe" "boy" "secret"
- It is mainly on Satanism and aestheticism -

Oh, Byung-Woo

The woman of the early chief character of the Tanizaki literature is said to be the devil. I accord with the beauty and the evil for "a tattoo", and the subject, "a beautiful person is a strong man" gets wide. A sadist of Mrs. South child seen in "a giraffe" and a masochist of Prince ghost of 衛国, the masochist of the bewitching photon and boy and others as a sadist and the prostitute seen in "a boy", a western-style prostitute-shaped married woman sadist seen in "a secret" and a man masochist. It is a short story that the strong one side of the narcissism of Tanizaki has a glimpse of each commonality of four works and gets. I know that Tanizaki was particular about the beauty and sexual desire of the human corporeality and an evil spirit and the thing which said in this way through his early short story group. In other words, Tanizaki's literature is the beauty and evil and the Trinity of the Eros.